大人の学校２００４

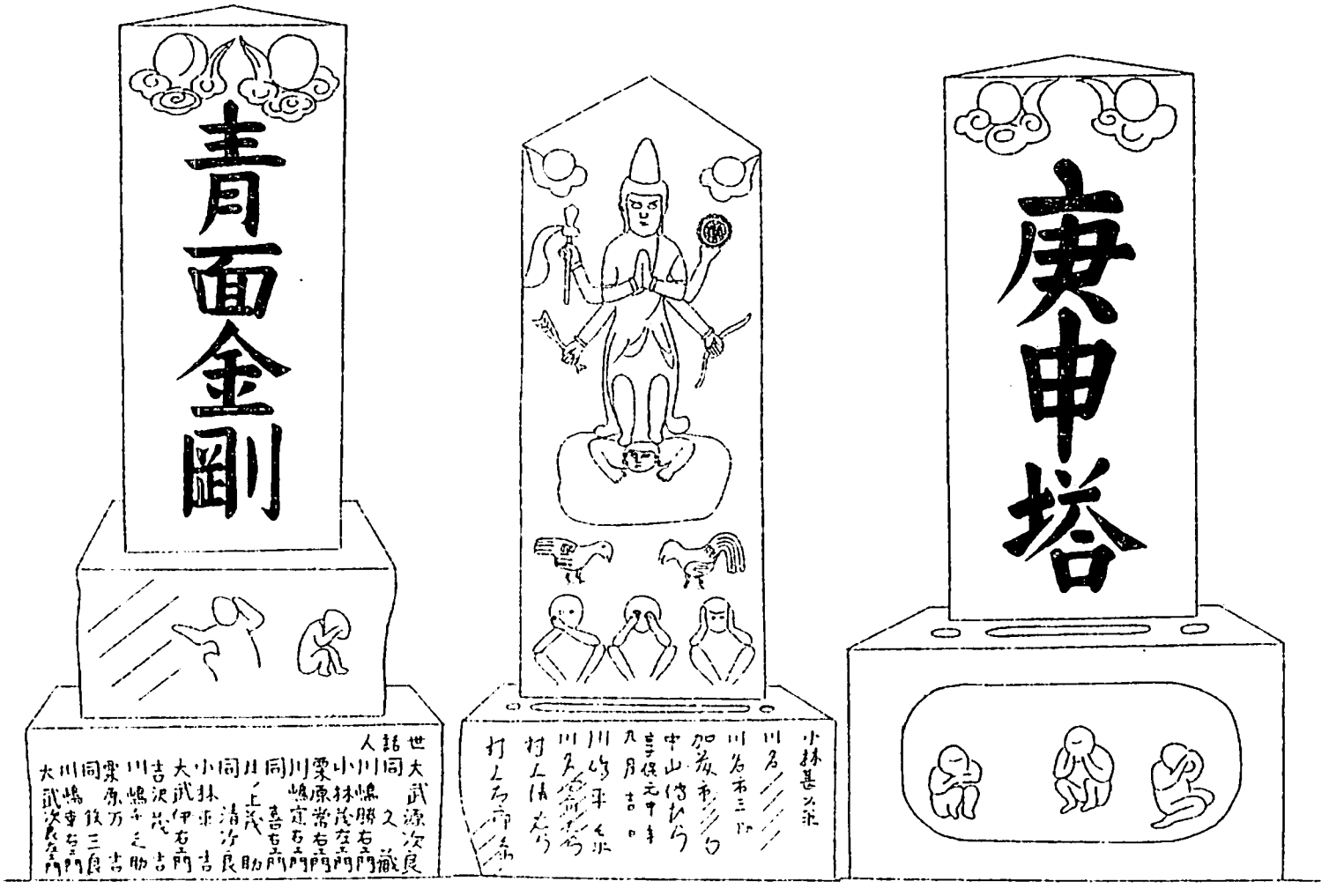
越谷の石仏に出逢う

石仏の見方・楽しみ方

平成１６年１２月１１日（土）

北越谷セミナー室

《この小冊子からの図版、文章等の無断転載を禁じます》



ＮＰＯ法人・越谷市郷土研究会　加藤幸一

庚申塔（こうしんとう）

腕が六本もある青面金剛と呼ばれる仏様を本尊とする庚申信仰の庚申塔である。必ずといってよいほど

「見ざる・聞かざる・言わざる」

の三猿が見られる。

庚申信仰は六十日に一度やってくる干支の庚申の日に庚申講の仲間たちが一堂に会し、徹夜して過ごす行事である。それは、人間の体の中に潜んでいる三尸（さんし）と言われる三匹の尸虫が、庚申の日の夜に、人の睡眠中に口から抜け出して天に昇り、その人が日頃犯した罪を天の神に暴く。するとその報告をもとに判断して生命を奪ったり、若死にさせたりする。そのために、その日は三尸虫が身体から抜け出る機会を与えないように寝ないのである。

このような庚申信仰は、かつては全国津々浦々で見られたのである。

よくわかる仏像の基礎

――石仏の見方を知るために――

加藤幸一

私たちがよく言う『仏様』とは三つの意味がある。一つは仏教を開いたお釈迦様（釈迦牟尼仏）、二つ目はお寺に祀られているさまざまな仏様、三つ目は死者のことである。

また『仏像』とは、仏様の像という意味で、釈迦の像など、お寺に祀られているさまざまな仏様の像（彫像や画像）のことである。

ヨーロッパなど世界各国に広まっているキリスト教では、偶像崇拝を極端に嫌っている。西アジアや南アジア・東南アジアに広がるイスラム教もキリスト教と同様に偶像崇拝を嫌っている。しかし、わが国では偶像である仏像は生活の中に溶け込んでいる。

第1部　仏像の種類

仏像は、大きく分けると次の四つに分類される。

一．如来像

一番偉い仏様で、優しい顔をしていて、頭には肉髻や螺髪が見られ、身には納衣と裟のみをまとっている。

二．菩薩像

二番目に偉い仏様で、優しい顔をしていて、頭には冠をかぶり、身にはさまざまな飾り物をしている。

三．明王像

三番目に偉い仏様で、怖い顔をしている。

四．天部像

如来にも菩薩にも明王にも属さない仏様で、仏法を守る。

如来は悟りに達成した成道者であり、菩薩は悟りを求めて修行中の修行者であり、明王は如来の化身であり、天部は仏法の守護者であるといえる。

以上の如来・菩薩・明王・天（天部）の他に、羅漢・祖師・高僧の像や神像なども広い意味では仏像に入れることがある。

1．如来について

> 一番偉い仏様。上半身は納衣を着て、下半身は裟をはいているだけのお姿である。飾り物は一切身につけていない。頭には肉髻と螺髪が見られ、顔付きは柔和である。

如来とは、宇宙の真理を悟り、最高の境地に達した仏様のことである。性を超越し、男性でも女性でもない。

如来は、仏教が古代インドで生まれたこともあって、高温のため寒暑をしのぐに足るだけの納衣と裟をまとっているだけである。冠・瓔珞・釧・天衣などの装身具は一切身に付けていない。ただし、大日如来は、菩薩の姿をして装身具を身につけ例外である。

三十二相

仏様の背丈は、一丈六尺（「丈六」、約五メートル）と伝えられている。座った時の座高は「半丈六」である。そして、三十二のすぐれた姿・顔かたちを備えているという。これを三十二相という。主なものをあげると次の通りである。

〈肉髻相〉頭上は髻（髪の毛を集めて束ねた髷）のような、つまりお椀を伏せたような肉の盛り上がりが見られるという。

〈白毫相〉眉と眉との間にある右に旋回した渦巻き状をした白い毛がみられるという。

〈眼色如紺青相〉目の玉が青色をしているという。

〈四十齒相〉大人の歯は三十二本（『四八（歯は）、三十二』と語呂合わせして覚えるとよい）あるのが普通であるが、四十本もの歯があるという。

〈四牙白浄相〉上下四本の歯は牙のように白いという。

〈広長舌相〉舌は広くて長く、口から出して広げると顔をおおい、頭の髪の生え際まで届くという。

〈梵声相〉仏様は、大きな声でしかも美声なので、聞く人に深い感銘を与えるという。ほら貝の音は仏様の声をあらわしているといわれている。

〈獅子頰相〉獅子の頰のように両頰が豊かに膨らんでいるという。

〈肩円満相〉肩が豊かに盛り上がって丸みを帯びているという。

〈手足縵網相〉多くの人々を漏れなく救い上げられるようにと、手足の指の間に水掻きのような膜が見られるという。

〈正立手摩膝相〉直立して腕を下に伸ばしたとき、救いの手をさしのべやすいようにと手が膝をなでるくらいの所まで届くという。

〈円身相（身広長等相）〉両手を広げた長さと身長とが同じ長さであるという。

〈馬陰蔵相〉男根が馬のように体内に隠されているという。これは仏様が男でも女でもなく、男女の性を超越していることを示している。馬陰蔵相ともいう。

〈金色相〉全身が金色に輝いているという。

〈丈光相（常光一丈相）〉身体の周辺に一丈（約三メートル）の長さの光を放っているという。

〈毛孔生青色相〉一つ一つ毛穴から青色の毛が生えているという。

〈毛上向相〉身体にあるすべての毛が右回りに螺旋を描き、上の方に向いているという。

〈足下安平立相〉歩くときに足の裏で平等に地面を踏めるようにと、足の裏はくぼんだところのない偏平足をして、踏まない部分がないようにしているという。

〈千輻輪相（足下二輪相）〉足裏の中央には、千本の輻（スポーク）

を持つ車輪のような千輻輪の文様が見られるという。

また、千輻輪の輪の他に輪宝の形をした太陽の文様の輪も見られることから『足下二輪相』とも言う。

その他の三十二相は次の通りである。

足跟満足相（かかとが広くて平らである）、足趺高満相（足の甲が盛り上がっている）、手足柔軟相（手足が柔らかい）、長指相（手足の指が長い）、伊泥延相（伊泥延［一種の鹿］のように股・膝・ふくらはぎがしなやかに伸びている）、細薄皮相（皮膚がきめ細かく美しい）、両腋満相（腋の下が盛り上がる）、身広端正相（体全体が大きくて端正である）、七処隆満相（首・肩・腰・両手・両足が豊かに盛り上がっている）、上身如獅子相（上半身がライオンのように威厳がある）、齒白斉密相（齒がすきまなく並ぶ）、味中得上味相（何を食べても最高の味に変える）、牛眼睫相（まつげが牛のように長くて美しい）

以上のように仏様の三十二の肉体的な特徴を三十二相というが、さらに八十の小さな特質をも備えているという。これを八十種好といい、三十二相とあわせて『三十二相八十種好』と呼ばれる。

「相好を崩す」の『相好』はここからきている。

如来像の図の説明

肉髻――仏様の頭上にあり、髻（髪の毛を集めて束ねた髷）のように頭の頂上の骨が盛り上がったもの。お椀を伏せたような形になっている。仏様は我々人間よりもふくれ上がった分だけ知恵が余分にあるといわれている。

肉髻珠――肉髻の前面にある赤い玉。肉髻の部分は髪の毛が生え

阿弥陀如来

ておらず、地肌が見えて赤くなっているのが本来だという。しかし実際の仏像は肉髻の部分まで螺髪と呼ばれる髪の毛でおおわれている。そのため赤い肉髻の名残として肉髻の前面に肉髻珠を表すのである。

螺髪――右に旋回してぐるぐると螺旋状をした小さな渦巻状の巻き毛がたくさん集まった形の頭髪。「螺」は、法螺貝（巻き貝）の「螺」である。仏様の体毛はすべて右に旋回しているとされる。毛髪がこのように縮れているのは、インド人の特徴を表しているからであるという。

白毫――仏様の眉間にある渦巻状の白い毛。すみずみまで見通せる光を放っているという。仏像では、水晶をはめ込んで白毫を表し、仏画では、白毫から出た光を線で表すことがある。

光背――仏様から発している光をあらわしていて、仏像の背後に付けるものである。光背には、頭光や身光があげられる。

頭光――頭の後ろにある円形のもの。仏様の頭から発している光である。

身光――身体の後ろにある楕円形のもの。仏様の胴体から発している光である。

結跏趺座――跏（足の裏）と趺（足の表）とを結んで座するという意味で、あぐらをかき、両方の足の裏を上に向け、右脚を左ももに左脚を右ももにのせて組む。座禅の時の座り方と同じである。

なお、結跏趺座には吉祥座と降魔座の二種類がある。吉祥座は右脚上、つまり右脚を左脚の上にのせた形で、右脚が前面に見られる。降魔座はその逆で、左脚上になっていて、左脚が前面に見られる。吉祥座は阿弥陀如来に、降魔座は悪魔を降伏し、悟りを開いたという釈迦如来に多く見られる。筆者は、『右（ぎ）（き）吉祥座、阿弥陀如来』とゴロ合わせして覚えている。

衲衣――肩から羽織った大きな布。衲衣の着方で、衲衣を左肩はおおっているが右肩はおおわない、つまり右肩をあらわにする着方の『偏袒右肩』（『袒』とは「はだぬぐ」という意味）と、両方の肩をおおい通した『通肩』の二種類がある。前者の偏袒右肩は右肩をあらわにして相手に敬意を表す正式な着方で、後者の通肩は略式で、本来は外出の時の着方である。

偏袒右肩　吉祥座
（印相は阿弥陀定印）

通　肩　　降魔座
（印相は禅定印）

偏袒右肩は一枚の布を身体に巻つけて箱こなす方法である。中には背中からあらわになった右肩にまで布の一部がかかっている場合もあり、一見して通肩に見えるがこれも偏袒右肩である。むしろ右肩にまで布の一部がかかっている方が多く見られる。一方、通肩は二枚の布を使って身体に巻き付けて箱こなす方法である。

裳――――下半身に付ける巻きスカートのようなもの。

印相――――悟りや誓い願った誓願などの宗教的理念を表すために、手の指で作るさまざまな形。これによって仏像の種類をある程度まで見分けることができる。

2・菩薩について

> 如来の次ぎに偉い仏様。髪は結い上げた頭髪で、その上に冠をかぶる。身には条帛を付け、その上に天衣を飾り、全身にはさまざまな飾り物を付けている。顔付きは柔和である。

菩薩は、上に向かっては如来の境地を目ざして悟りの道を求めて修行中である。これを『上求菩提』という。菩提とは悟りという意味である。他方で菩薩は、下に向かってはすべての人々を教化し救おうとしている。これを『下化衆生』という。衆生とは、この世に生きているすべての生き物という意味である。狭い意味では人々をさす。

つまり菩薩は、『上求菩提・下化衆生』の両方を兼ね備えた如来の一番弟子格の尊者といえる。

如来が出家（家を出ること）後に家を出て修行の道に入っている姿をしているのに対し、菩薩はまだ悟りを開いていない出家前の貴族の姿をしている。そのため装身具などを身につけ華やかである。ただし例外がある。地蔵菩薩は僧侶の姿を、馬頭観音菩薩は明王の姿をしている。

つまり菩薩は、裸の上半身には条帛を左肩から右の腰へとまとい、さらにその上に細長くて薄物の布である天衣を両肩から垂らしてふわりとまとっている。下半身は巻きスカートのような裳（菩薩・明王の場合は正しくは『裙』という）を身につけている。そして頭上には宝冠、胸には首飾りのような瓔珞、腕首には腕輪のような腕釧、肘の上方には臂釧、足首には足釧というように、装身具をつけて身を飾っているのである。頭上には宝冠をかぶらずに髻と呼ばれる髻のままとなっている場合もある。また髻には束ねた髪の残りを垂らす垂髪がよく見うけられる。

なお菩薩も、如来と同様に性を超越し、男性でも女性でもない。

菩薩像の図の説明

宝冠――菩薩や大日如来がかぶる冠。

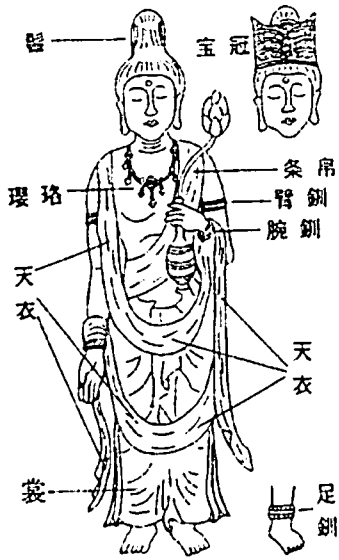
条帛――裸の上半身に、たすきのように菩薩の左肩から胸を通って腰へと架け渡される布。

天衣――薄物の細長い布で、両肩から長く垂らして身体の脇や裾のあたりをふわりとまとっている。

瓔珞――金・銀・宝石・玉などを紐などでつなぎ連ねた飾り物。仏様の首飾りあるいは胸飾りとして利用される。また天蓋から垂れ下げる飾りにも利用される。

釧――輪の形をした装身具で、腕釧・臂釧・足釧の三種類がある。

髻――菩薩・明王・天部が結い上げた髻。宝髻ともいう。



観音菩薩

3・明王について

菩薩の次に偉い仏様。大日如来の使者あるいは化身で、大変恐ろしい顔付きと姿をしている。冠や天衣は身につけていない。

明王は、大日如来の使者あるいは化身（仏様の変身）で、すさまじい忿怒の形相となっている。ただし孔雀明王は例外で、菩薩の姿をしている。

明王は、悪魔を押さえ鎮めたり、救いがたい人々を導くため、明王の背後には火炎が燃え盛り、武器などをもって大変恐ろしい姿となっている。これは慈悲の力で人々を救おうとする柔和な表情の菩薩とは対照的で、菩薩の慈悲だけでは救えない愚かな人々を忿怒の姿で救おうとしている。

服装は基本的には菩薩と同じであるとされるが、大きな違いは天衣や宝冠ははずしていることである。

明王像

不動明王

なお明王の『明』とは、明呪すなわち真言陀羅尼と言う呪文のことである。密教の教えでは、真言陀羅尼を一心に唱えると、その力は絶大であり、さまざまな願い事がかなえられるという。つまり明王は、呪文を唱えて祈るなら、さまざまな願い事をかなえさせてくれる王という意味の密教の仏様である。

4・天部について

> 天部は如来・菩薩・明王のどれにも属さない、位が一番低い仏様。仏法を守っている。

天（天部）は仏教が広まる以前の古代インドの民間信仰の神々やバラモン教（のちのヒンドゥー教［インド教］）の神々などが仏教に取り入れられたもので、天上界に住み仏法を守る神である。天部は、姿や顔付きがこれといって定めがなく、男あり女あり、さらには鳥獣を人格化したものまである。

5・その他の仏像

以上の如来や菩薩、明王、天部にも属さない仏像の例として、祖師像としての弘法大師（空海）像と民間信仰に見られる青面金剛の石仏（庚申塔）を下段に紹介した。

［天部像］

梵天

帝釈天

弁才天

歓喜天

［その他の仏像］

弘法大師

青面金剛

第2部　さまざまな如来像

如来にはさまざまな種類がある。菩薩形をしている大日如来を除いたすべて如来は、どれも同じ如来形をしているため、如来の種類を判別するには印相を手掛かりにするほかはないのである。

如来の印相

a・施無畏・与願印

右手が施無畏印、左手が与願印である。施無畏とは「無畏を施す」つまり不安の除去を意味し、施無畏印は五指を伸ばし、その指先を上に向けて胸前に置く印相である。与願は「願いを与える」つまり願いをかなえることを意味し、与願印は、五指を伸ばして、座像の時は手のひらを上に向けて膝のあたりに置き、立像の時は手のひらを下に垂らす印相である。

なお、飛鳥時代の与願印は小指と薬指を上方に曲げている。

施無畏・与願印を結んでいる
如来像

《通仏相》

施無畏・与願印を結んだ印相は、どの如来にもみられる如来共通の印相である。このように如来共通の印相を「通仏相」という。奈良時代以前の如来像は、釈迦如来でも薬師如来でも阿弥陀如来でも施無畏・与願印を結ぶ通仏相をしているため、外見だけでは区別はつきにくい。その如来像の造立の縁起などがあれば何の如来像かがわかるのみなのである。

《通仏相の如来の区別の仕方》

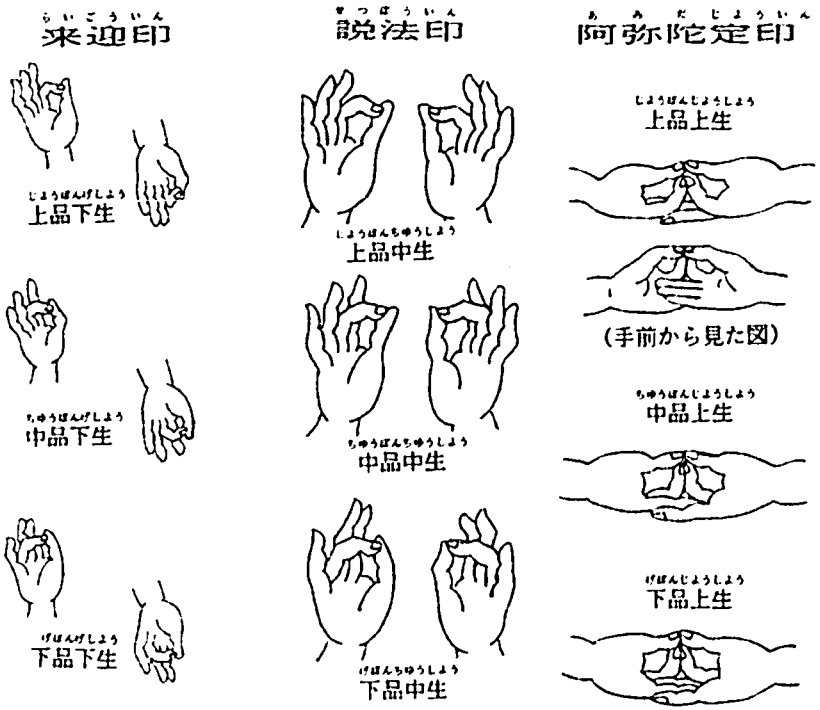
通仏相での如来像の区別は、施無畏印についてみるとよい。釈迦は中指を少し前に出し、薬師は薬指を少し前に出していることがあるので、それによって両者を区別できることがある。

また、結跏趺座をしている如来像では、それが吉祥座なら阿弥陀、降魔座なら釈迦であると思われる。

b・阿弥陀九品印

右手、左手ともに、親指と他の一本の指で輪を作っている印相で、九種類ある。つまり阿弥陀如来は、往生者の信仰の深さ・機根の高さ（悟りを開くべき素質や能力の高さ）や修行の多さの違いによって次のような九つの救い方のランクがある。

阿弥陀定印（禅定印の一種、略して弥陀定印ともいう）が三つの等級、阿弥陀説法印（転法輪印の一種）も三つの等級、阿



弥陀来迎印（施無畏・与願印の一種）も三つの等級、計九つの等級で、これを阿弥陀九品印という。

このうちよく見られるのは上品上生の「阿弥陀定印」、上品下生の「来迎印」の二つである。『品』とは信仰の深さの等級を、『生』は善行の多さの等級をあらわすという。

なお、阿弥陀来迎印の珍しい例として左右両手の位置関係が全く逆である『逆手来迎印』の仏像がある。これは中国の宋時代の阿弥陀仏の絵像の印相が左右逆となっていたことの影響を受けたものである。

c. 禅定印（法界定印）

禅定印は座禅を組んで深い瞑想に入っていることを示す印相で、釈迦如来が結ぶ。禅定とは、心を落ち着けて精神を統一することである。釈迦如来がブダガヤの菩提樹の下で瞑想にはいり、悟りを開いたときに結んだ印と言われる。菩提樹の「菩提」とは「悟り」という意味である。大日如来が結べば法界定印と呼ぶ。腕釧があるので大日如来の印とわかる。理（悟り）の境地を示す胎蔵界大日如来の印である。禅定印を結んだ釈迦如来像は禅宗系の寺院の本尊に、法界定印を結んだ胎蔵界大日如来像は密教系寺院の本尊によく見られる。

d．薬壺印（法界定印の一種）

薬師如来が薬壺を持って法界定印を結べば、薬壺印となる。

e．智拳印

金剛界大日如来の結ぶ印で、智（思考）を表す。左手は金剛拳（拳の中に親指を入れた形の印）を結び、その左の手の金剛拳から出した人差し指を右の手でつかむ。右手はこのとき、親指と人差し指の先を付けて、さらにそれを左手の人差し指の先にも付けることによって、以上の三指の先が一点で付けている状態となる。

なお、忍者が結ぶ印が大日如来の智拳印なのは、密教を取り入れた山岳仏教の修験道の影響を受けたからと考えられている。

1．釈迦如来（お釈迦様）

釈迦はインドで仏教を開いた実在の人物である。釈迦如来が結ぶ施無畏・与願印は説法印の一種であり、施無畏・与願印を結んだ立像の釈迦如来は各地に説法をしている様子をあらわしているという。

［像容］ア．如来形をしていて、施無畏・与願印をとる。右手の施無畏印では中指を少し前に出していることが多い。立像と座像の両方がある。

イ．如来形をしていて、印相は禅定印をとる。必ず座像である。釈迦が菩提樹の下で瞑想にふけっている姿である。

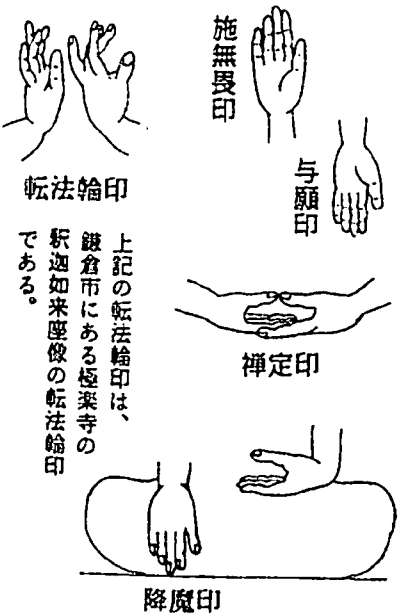
施無畏・与願印を結ぶ
釈迦如来

禅定印を結ぶ釈迦如来

［三尊像］釈迦三尊の脇侍は、文殊菩薩（向かって右）と普賢菩薩（向かって左）である。

《釈迦五印》

釈迦五印とは、施無畏印・与願印・禅定印・降魔印・転法輪印の五つである。このうち、施無畏印・与願印及び転法輪印は釈迦如来のみが結ぶ印相ではなく、他の如来でも結ぶ如来共通の印相、つまり通仏相の印相である。



上記の転法輪印は、鎌倉市にある極楽寺の釈迦如来座像の転法輪印である。

ブダガヤの菩提樹のもとで独座して禅定印を結び、瞑想を続けていた釈迦が最後に悟りを得るが、降魔印は、悪魔の誘惑や妨害に打ち勝って悟りを得たことに対する証人として大地の神々を呼ぶために五指を伸ばして大地に触れた時の印相である。この時に悪魔は退散し、大地の神々が現れるのである。悪魔を降伏するという意味で降魔印というが、地に付けるので触地印ともいう。他に阿閦如来も触地印を結んでいる。

転法輪印は、釈迦が鹿野苑で初めて五人の比丘のために説教した時（この初めての説法を「初転法輪」という）に結んだ印である。ガンダーラの仏像以来見られる印相である。

「転法輪」とは、法輪（車輪のような形をして八方に矛先が出ていて、相手に向けて投げる武器、輪宝）を転がすという意味で、敵を倒し説法して正しい教えが広まっていくことを示しているという。この印相は左右の手を胸の前に上げ、法輪を転がそうとする様子を表しているという。説法印の一種である。

《釈迦の十大弟子》

釈迦の多くの弟子の中で、特に優れた十人の弟子のことで、各分野ごとの第一人者たちである。十大弟子は次の通りである。

◎舎利仏（知恵第一）

◎目連（神通力によって超人的な力をもったので、神通第一）

盂羅盆会（お盆）の行事は、餓鬼道に落ちて逆さまにつるされ苦しんでいる母親を、子の目連が救った話より成立したとの俗説がある。お盆に先祖代々や父母を供養するのはこのためである。

◎羅睺羅（戒律による修行を積んだので、密行第一）

◎富楼那（話術にすぐれていたので、説法第一）

◎須菩提（『空』の意味をよく理解したので、解空第一）

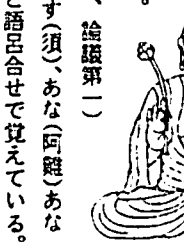
◎阿難（聞いた教えはすべて覚えたので、多聞第一）

釈迦のいとこ。釈迦入滅迄、常にそばにいて仕え、釈迦の教えを聞く機会に最も恵まれた。

あるとき阿難が修行していると、一匹の餓鬼があらわれて、
「あなたの顔には、死相が出ている。」
と言われる。阿難は、
「この死相から逃れる方法は。」
と尋ねる。そこで餓鬼は、
「我々餓鬼に食物を与え、有り難い教えを説いてくれ。」
と答える。早速実行する。
これが施餓鬼会の起こりである。

◎阿那律（遠近・昼夜、見通す眼をもつので、天眼第一）
◎優婆離（戒律を堅く守ったので、持戒第一）
◎迦葉（さまざまな苦行に耐えるので、頭陀第一）

釈迦が一枝の蓮華をひねったのを見て、迦葉一人がその意味を理解してほほえんだという「拈華微笑」の釈迦如来（下図）の逸話がある。



◎迦旃延（弁舌がさわやかであるので、論議第一）

淡笹者は、「しゃ（舎）も（目）ら（羅）ふ（富）す（須）、あな（阿難）あな（阿那）う（優）かしょう（迦葉）か（迦）」と語呂合せで覚えている。

《十八羅漢像》

他に釈迦の弟子としては、十六羅漢、さらに五百羅漢もある。十六羅漢は、釈迦三尊十六羅漢像（画像）によく見られる。五百羅漢は、川越の喜多院、目黒の大円寺の石像や目黒の五百羅漢寺（江戸時代は江戸の本所にあった）の木像などが知られる。

羅漢は、阿羅漢の略で、上座部仏教（小乗仏教）では、最高の悟りに達した尊者。しかしここでは、釈迦の弟子としてとらえられることが多い。

《賓頭盧》

羅漢の一人、賓頭盧尊者は十六羅漢には属していないが、一説には、十六羅漢の第一尊者の賓度羅跋羅堕闍尊者とされる。

賓頭盧尊者は、末法の人々に斎会（僧尼を集めて、斎食〔食事〕を施す法会）を設けて食事などを供養したといわれる。そのため食堂にまつられるのが本来である。

しかし、賓頭盧には病のある人がこの像の自分と同じ病のある身体の部分を撫でて、さらに自分の病の部分を撫でると治るという俗信があり、寺院の本堂の外側などにに安置されていて人々によって単独で信仰され、「撫で仏」とも呼ばれている。

昔はこの像を媒体に眼病などが移る心配あるというので、保健衛生上問題があるとして像の回りに金網をはって触れられないようにした寺院もあったという。

《八部衆（天竜八部衆）》

一方、釈迦の眷属（家来のこと）としては、釈迦に教化され、

釈迦の眷属となった、もと異教の神々である阿修羅などの八部衆（天竜八部衆）も上げられる。八部衆とは次の通りである。

◎「天」は、神。
◎「竜」は、竜神。
◎「夜叉」は、鬼神。
◎「乾闥婆」は、伎楽（古代インド・チベットの仮面音楽劇）の神。
◎「阿修羅」は、戦闘の神。
◎「迦楼羅」は、口から炎を吐く鳥頭人身の鳥。
◎「緊那羅」は、人に似るが神・人・畜生のいずれともいえない人非人の姿をした歌舞の神。
◎「摩睺羅迦」は蛇の神。

《清涼寺式釈迦如来像》

釈迦が尼連禅河という川で身を清めた時の、その川の水に納衣がぬれた姿であると言われている。京都の嵯峨にある清涼寺（通称は「嵯峨釈迦堂」）の釈迦如来像が代表的である。奝然が宋の国で作らせて、九八五年に持ち帰ったもの。その後、各地で模倣されて、この様式が広がった。

通肩の釈迦の納衣の衣紋の線が襟から腹へかけて両端が上向きの半円の連続とし、胸の下の脚の付け根はY字形のようになり、両方の脚ともに両端が上向きの縦長の半円を連続させている。頭髪は、螺髪ではなく、組み紐か縄のようなものを束ねて巻いているようになっている。印相は施無畏・与願印である。

2・阿弥陀如来（阿弥陀様）

極楽浄土に住むという阿弥陀如来は、西方の十万億土のかなたにある極楽浄土を開いた仏様である。　人々がこの仏様を信じて『南無阿弥陀仏』の念仏を唱えるだけで、この仏様の導きによって死後に極楽浄土に生まれ変われるという。

阿弥陀とは『無量』と言う意味で、「光」や「寿命」が無量であることから「無量光如来」とか「無量寿如来」とも呼ばれる。

阿弥陀如来について説かれている経典が『阿弥陀経』『無量寿経』『観無量寿経』の浄土三部経である。

日本以外のインドや中国など、大陸が広がる地域では、日の出よりも日没の美しさが注目されたためか、日没する広野のはるかかなたにすばらしい世界である極楽浄土が広がっていると信じられたのであろう。

〔像　容〕如来形をしていて、印相は阿弥陀九品印をとる。

阿弥陀定印は釈迦如来の禅定印と同じく瞑想している姿を表している。必ず座像である。説法印は、人々に説法をしている姿を表している。来迎印は亡くなられた人を迎えに行く姿を表している。

阿弥陀如来の座像は吉祥座をとっている。

定印の阿弥陀如来

来迎印の阿弥陀如来

説法印の
阿弥陀如来

〔三尊像〕阿弥陀三尊の脇侍は、観音菩薩（向かって右）と勢至菩薩（向かって左）である。

《阿弥陀二尊の来迎図》

阿弥陀来迎印を結んだ阿弥陀如来が、観音・勢至の両菩薩をともなって、往生した人を迎えに、雲に乗って降りて来る場面を描いた仏画が「阿弥陀三尊来迎図」である。観音菩薩は人々を極楽浄土へ導くために乗せる蓮台を両手で持ち、勢至菩薩は合掌している。両菩薩とも軽く膝を曲げる。中には「早来迎」と言って、早い雲に乗って降りて来る場合は、膝を深く曲げ、腰を一段と落とす来迎図もみられる。

その他に、二十五人の菩薩を従えた「阿弥陀二十五菩薩来迎図」や、さらにもっと多くの聖衆（極楽浄土に住む菩薩たち）を従えた「阿弥陀聖衆来迎図」も見られる。

《五劫思惟の阿弥陀如来》

阿弥陀如来はもとインドに住む王子であったが、世自在王如来のもとで出家して法蔵比丘といった。世自在如来は法蔵比丘に二百十億というさまざまな仏の国土（仏国土）を見させた。そこで法蔵比丘は五劫という長い年月をかけて独座し、将来自分が悟りを得た後に生まれるべき仏の国土に関して思惟し、瞑想した。これを『五劫思惟』と言う。五劫の間を独座思惟したので五劫思惟の阿弥陀如来像が伸び放題となった頭髪の姿をしているのはそのためである。また、両手は合掌している。

劫とは長さの単位で、人類の誕生から破滅までの長さが四劫で、五劫はさらにこれを超えた期間である。

《阿弥陀の四十八誓願》

五劫の期間を独座思惟し、最後にいくつもある仏の国土の中から一つだけを選択した。それが西方十万億土のかなたにある極楽浄土である。次に法蔵比丘は、極楽浄土に生まれ変わるために四十八の誓願をたてて修行した。そして、ついに悟りを得て極楽浄土に生まれ変わり仏陀（如来）となった。これが阿弥陀如来である。

阿弥陀如来の頭光に四十八本の光のすじが放射状に描かれていることがあるが、これは四十八誓願からきている。また、阿弥陀くじの名称はこの阿弥陀如来の後光（頭光）からきている。

《十八阿弥陀参り》

阿弥陀如来を安置している六ケ所の寺院を春と秋の彼岸に巡拝する信仰である。特に江戸の町で流行し、数字の『六』にちなんで、明け六ツ時（午前六時頃）に出発して、暮れ六ツ時（午後六時頃）に帰ることが流行した。

六阿弥陀の『六』のいわれは、阿弥陀如来を唱えるときの『南無阿弥陀仏』（六字名号）の六文字よりきている。

《善光寺式阿弥陀三尊像》

一つの舟型の光背の中に立像の阿弥陀三尊像が並ぶ一光三尊の形式をとっている。中尊の阿弥陀如来の印相は、阿弥陀九品印をとらず、右手は施無畏印で、左手は下にして、グーチョキパーのチョキを出したような人差し指と中指だけを伸ばしている（刀印）。観音・勢至の両脇侍は胸の前で両手の手の平を水平に重ねて、或いは宝珠を包むようにして水平に重ねている（持宝珠印）。

3・薬師如来（お薬師様）

東方のかなたの瑠璃色（青色）に光り輝く浄瑠璃光の世界、「浄瑠璃浄土」に住んでいる仏様である。

この仏様は人々を救うために十二の願いごと『薬師十二大願』を立てたが、そのうちの第七の大願である「人々のもろもろの病気を取り除き、心身を安楽にする」という願いに基づいて医師を意味する『薬師』の名がついた。この名の示すように、人々の病苦を救ったり、病気で死にかけている者には寿命を延ばしたりするなど医薬をつかさどる現世利益的性格の強い仏として信仰されてきた。特に目の病には大変御利益があるとの信仰があり、「向い目」の絵馬の奉納がよく見られた。

［像　容］ア・如来形をして、印相は右手が施無畏印、左手は与願印をして手のひらの上に薬壺（宝珠となっていることもある）を持つ。立像・座像の両方が見られる。

薬師如来像の施無畏印は薬指を少し前に出していることが多い。

イ・如来形をして、印相は薬壺印（薬壺を持った法界定印）で、必ず座像である。

〔三尊像〕薬師三尊の脇侍は、日光菩薩（向かって右）・月光菩薩（向かって左）である。

《薬師如来と天台宗の開祖最澄》

薬師如来の仏像は、天台宗系の寺院や薬師堂・瑠璃殿などに多く見られる。また、比叡山延暦寺の本尊も薬師如来像である。その理由は、最澄が比叡山に登って修行し、そこで木を切って薬師如来像一体を刻み、天台宗を開いたと言われるためである。

《薬師十二神将》

十二大願にちなんで、薬師如来の眷族（血筋のつながった一族）に十二神将がある。それぞれの身には甲冑をつけ、手には武器を持って唐代の武人の姿をし、それぞれの頭上には十二支の動物が配されている。本来は十二支とは全く無関係であった。後世に十二大願と十二支とが結びついたものであるという。

薬師如来の脇侍である日光・月光両菩薩は、それぞれが昼と夜とに主尊の薬師如来を守っているといわれ、さらに薬師如来の徳をすべての方角に及ぼすために十二の方角に配置されたのがこの十二神将であるといわれる。

また、薬師十二神将は、一日を子の刻から亥の刻までの十二時に分けたそれぞれの時（一時は約二時間）に、代わる代わるに主尊の薬師如来を守っているともいわれている。

十二神将とは宮毘羅大将をはじめ、次の十二人の大将である。十二神将の十二支は次の例が一般的である。それぞれの持物は一定していない。

宮毘羅大将（子…子の刻、零時頃　子の方角、北）

わが国では金毘羅と呼ぶ。

伐折羅大将（丑…丑の刻、二時頃　丑の方角、ほぼ北々東）
迷企羅大将（寅…寅の刻、四時頃　寅の方角、ほぼ東北東）
安底羅大将（卯…卯の刻、六時頃　卯の方角、東）
頞儞羅大将（辰…辰の刻、八時頃　辰の方角、ほぼ東南東）
珊底羅大将（巳…巳の刻、十時頃　巳の方角、ほぼ南々東）
因達羅大将（午…午の刻、十二時　午の方角、南）

古代インドの武勇神インドラ。わが国では帝釈天と呼ぶ。

波夷羅大将（未…未の刻、十四時　未の方角、ほぼ南々西）
摩虎羅大将（申…申の刻、十六時　申の方角、ほぼ西南西）
真達羅大将（酉…酉の刻、十八時　酉の方角、西）
招杜羅大将（戌…戌の刻、二十時　戌の方角、ほぼ西北西）
毘羯羅大将（亥…亥の刻、二十二時　亥の方角、ほぼ北々西）

以上の十二神将を唱者は、『くびめあん（宮・伐・迷・安）あにさん（頞儞・珊）、インドに（因）入って（波夷）、まこしん（摩虎・寅）しょうび（招・毘）』と独自に語呂合わせして覚えている。

《七仏薬師》

薬師如来の光背には、薬師如来の分身とされる合計六個の化仏（中央の薬師如来とあわせると七つとなる）、あるいは七個が付けられている。これは、東方の浄瑠璃国土に薬師如来を中心に曽名称吉祥如来など七仏が住んでいると説かれていることによる。

また、薬師如来像を安置している七ケ所の寺院を巡拝する七仏薬師にちなんだ信仰も見られた。

4・大日如来

大日如来は、真言密教（東密）の本尊で、「『日』の光は一辺を照らし、裏側を照らすことはできず、昼夜の別を作るが、この如来の光は一切平等に遍く照らし、陰を作らない『日』以上の光。」といい、『日』の神の威力を上回ることから『大』を付けて大日如来、あるいは遍く照らすことから遍照如来ともいう。この如来は、宇宙の実相（生滅変化する万物の奥にある真実の様子）を仏陀としたものという。つまり宇宙を仏格化した仏様である。それゆえ、密教では、すべての如来・菩薩・明王・天部（天）の上に位置し、すべての現象は大日如来の本質の現れとされている。人間もまた大日如来の本質であるから、修行によって大日如来と一体化することができるという「即身成仏」の考え方も生まれた。

像容は他の如来とは大きく違って菩薩形をとっている。つまり、髪を結い、冠をかぶり、身には装身具を飾り付けている。菩薩と像容は同じではあるが、菩薩以上に華やかさが見られ、釈迦・阿弥陀・薬師などのさまざまな如来よりもさらに上の位にあるとの威容を示し、すべての如来の中で最高の位を表している。宝冠には密教の五智如来の化仏が刻まれているとされ、これを五智宝冠（五仏宝冠）と呼んでいる。五智宝冠は大日如来の他に、弥勒菩薩・虚空蔵菩薩・五大虚空蔵菩薩などもかぶるものである。

大日如来は、理（悟り）の世界（宇宙）を表すという胎蔵界大日如来と智（思考）の世界を表すという金剛界大日如来の二種類に分かれ、それぞれの世界を支配している。胎蔵界の大日如来はさとりの境地を象徴する法界定印を結び、金剛界の大日如来は悪魔を打ち破る堅固な智恵を象徴する智拳印を結んでいる。

なお、大日如来を根本本尊とする真言密教（東密）は大日と釈迦は別の仏様としているが、天台密教（台密）では大日と釈迦とは一

応区別してはいるが、根本は同じ仏様であるととらえられている。

大日如来の仏像は、密教の根本本尊となり、真言宗系寺院や修験関係の寺院に多く見られる。

〔像　容〕ア・胎蔵界大日如来は、菩薩形をして、印相は法界定印を結び、座像である。

イ・金剛界大日如来は、菩薩形をして、印相は智拳印を結び、座像である。

5・その他の如来像

《密教の五仏『五智如来』》

密教とは、呪法（呪文を唱えて行う祈祷法）を通して仏の世界の真理をとらえ、その力を現世に発揮しようとする教えで、加持祈祷を重んじている。教えがとても深く、理解するのに大変難しい仏教である。真言宗が代表的であるが（これを東密という）、天台宗も密教を大いに取り入れている（これを台密という）。

この密教の教えの中に五智如来の仏様が説かれている。五智とは、大日如来がさとった五つの智恵という意味である。五智如来には、金剛界五仏と胎蔵界五仏の二種類がある。金剛界五仏とは、次のとおりである。

金剛界大日如来（菩薩形で、智拳印を結ぶ）

阿閦如来（左手は衣の一端を握り、又は拳で腹部へ置き、右手は五指を伸ばして指頭で地を指す阿閦触地印）

宝生如来（左手は衣の一端を握り、又は拳で腹部へ置き、右手は与願印。あるいは右手は指先を右外の方向にして体の横に出し、掌を前あるいは上に向ける）

阿弥陀如来（阿弥陀定印を結ぶ）

不空成就如来（左手は衣の一端を握り、右手は施無畏印。あるいは、釈迦如来と同体であるとして右手、左手でそれぞれ施無畏印、与願印をとる。）

一方、胎蔵界五仏はまれである。胎蔵界五仏は次のとおりである。

胎蔵界大日如来（菩薩形で、法界定印を結ぶ）
宝幢如来（右手は右横に出す与願印で左手は衣の一端をとる）
開敷華王如来（右手は前に出す与願印で左手は衣の一端をとる）
無量寿如来（阿弥陀如来の別称）
天鼓雷音如来（右手は触地印で左手は禅印をとって膝に置く）

以上が密教の金剛界と胎蔵界の五仏（五智如来）である。大日如来のかぶる宝冠を「五智宝冠」と呼ぶのは宝冠に五智如来の化仏が刻まれているとされることからである。

なお、層塔や宝篋印塔などの石塔の四面に五智如来を刻む場合は、大日如来は塔身の中央と見立て、東側面が阿閦如来像、南側面が宝生如来像、西側面が阿弥陀如来像、北側面が不空成就如来像と時計回りに配置される。この時計回りの回り方は仏教発祥の古代インドの影響を受けているからである。

《顕教の四方仏『塔四方仏』》

顕教の『四方仏』は、薬師如来、釈迦如来、阿弥陀如来、弥勒菩薩（あるいは弥勒如来）の四つの仏をさし、層塔の塔身軸部の四面に刻まれていることがよく見られるため『塔四方仏』とも呼ばれる。その配置は東に薬師（東方の浄瑠璃の浄土に住む）、南に釈迦、西に阿弥陀（西方の極楽浄土に住む）、さらに北に弥勒となっている。

顕教とは、釈迦の教えを経典によって学ぶ教えで、教えがやさしくて、誰にでも理解しやすい仏教のことである。教えが大変難しい密教以外の仏教をさす。

五重塔

《毘盧舎那仏（盧舎那仏）と大日如来》

華厳宗の総本山である東大寺にある大仏が毘盧舎那仏で、「三千大千世界」の頂点にたつ仏様である。如来の姿をしている。

毘盧舎那仏像は施無畏・与願印をした釈迦如来像と同じであるが、

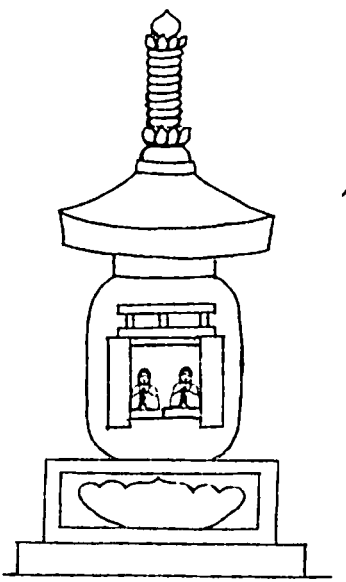
光背や台座蓮弁に多くの仏様がびっしりと見られる。これらのびっしりと刻まれた仏様はすべて釈迦如来像である。

地球上に現れた釈迦は小釈迦の一人で、それを千人程集めた世界を小千世界と呼び、そこに一人の中釈迦がいる。さらにその中釈迦を千人集めた世界を中千世界と呼び、そこに一人の大釈迦がいる。さらにその上、その大釈迦を千人集めた世界を大千世界と呼ぶ。これが全宇宙で、このように千が三重になっていることから「三千大千世界」と言うのである。

それに対して、「摩訶毘盧遮那仏」は、密教でいう菩薩の姿をした大日如来を指している。『摩訶』とは「優れていて偉大であること」を意味し、『毘盧遮那』とは「光り輝くもの」つまり「太陽」を意味している。如来の姿をした顕教宗の毘盧舎那仏（毘盧舎那如来）と菩薩の姿をした密教の摩訶毘盧遮那仏（毘盧遮那仏、大日如来）は、「舎」と「遮」の字の違いがあるが、宇宙を支配する仏様と言う意味で相通ずるものがある。

《多宝如来》

釈迦が法華経を説いたとき、地面の中から宝塔が出現した。その宝塔の中にいた多宝如来が釈迦が説法をした法華経をほめたたえ、塔中に釈迦を招いて、扉を開いて迎え入れ、自分の席の半分を譲り、



宝塔

多宝・釈迦の二仏が同座したとのエピソードがある。そのことから宝塔の塔身軸部に多宝・釈迦の二仏併座の像が刻まれる。多宝如来のみ単独で刻まれることはない。向かって右側が多宝如来、左側が釈迦如来である。多宝・釈迦ともに合掌しているのが一般的である。

《題目塔》

多宝・釈迦は、法華経の題目と結び付いて、中央に題目の『南無妙法蓮華経』を、左右に『南無多宝如来』（向かって右側）『南無釈迦牟尼仏』（向かって左側）と文字が刻まれた題目塔が見られる。「南無」とは「ああ」という意味合いの感嘆の言葉で、「帰命」と訳す。

《弥勒如来》

弥勒菩薩は、仏滅後の五十六億七千万年後に須弥山の上空にある兜率天より下ってこの世に現れ、竜下樹のもとで悟りを開き、弥勒

如来となる。そしてこの世の人々を救う。

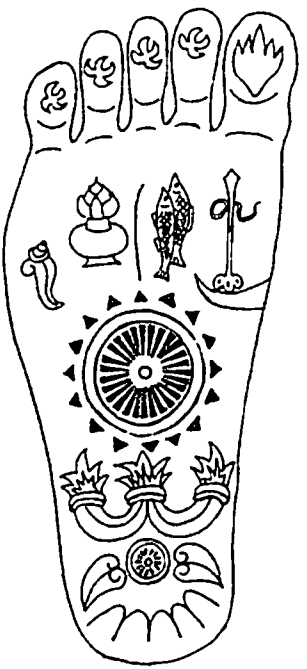
この弥勒如来は、如来形をしていて、通仏相の施無畏・与願印を結んでいる。

《仏足石》

古代インド仏教の初期では、釈迦の像を刻むことを畏敬し、仏像は作られなかった。そこで釈迦の姿の代わりに釈迦の象徴となる宝輪、菩提樹、天蓋などを礼拝したり、説法した時の釈迦の足の裏の足型を石に刻んで礼拝したり、また釈迦の遺骨を安置した舎利塔を礼拝したりした。

足の裏を描いた石を仏足石（ぶっそくせき）という。わが国最古のものは奈良の薬師寺に現存する天平勝宝五年（七五三、「しちごさん」と覚えるとよい）の仏足石である。仏足石は江戸時代中頃より各地で作られるようになる。

仏足石には釈迦の足の裏側に見られるという千輻輪相が刻まれている。すなわち、かかとの方から見ていくと、かかとには五つの山があり、その五つの山の上の両端には雲があり、その両側の雲の間から輪宝の形をした太陽がでていて、その太陽の更に上には、仏法僧の三つを表す三宝がある。これは梵天の冠であるとの説がある。そして中央部には千輻輪という千本の輻（スポーク）をもつという車輪のような輪宝がある。また、更にその上には親指の付け根には金剛杵と呼ばれる鉾（剣）があり、その隣には双魚と呼ばれる二匹の魚が並んで見られる。魚は、陸地の生物が一切滅んでも、海の中の魚だけが生き残ったというインドの神話から不滅を表すという。さらに隣りには宝瓶と呼ばれる瓶（瓶）、そして小指の付け根ありには法螺貝が見られる。また、親指には月王と呼ばれる赤々と燃えている月、その他の指にはそれぞれに卍花文と呼ばれる卍の形をした花の模様が見られる。卍は古代インドの神話に出てくるヒンドゥー教の神、ヴィシュヌの胸に現れた吉祥の印という。



※右図は、主に京都醍醐寺の仏足石を参考にして描いた（筆者）。

第3部　さまざまな菩薩像

菩薩はさまざまな種類があり、大部分は菩薩形をとっているが、菩薩形をとらない菩薩もある。一つは地蔵菩薩で、お坊さんの姿をしている。もう一つは馬頭観音菩薩で、明王と同じ怒怒の形相をしている。

1・聖観音菩薩（観音菩薩・観音様）

菩薩にはさまざまな種類がある。その代表が観音菩薩である。

観音菩薩にもさまざまな種類がある。つまり、本来の観音菩薩である「聖観音菩薩」とその聖観音菩薩が変化したさまざまな「変化観音菩薩」である。

聖観音菩薩とは神聖なる観音と言う意味である。変化観音菩薩と区別するためにあえて聖観音菩薩と言うのである。正しい観音という意味で「正観音」と書くこともある。

観音菩薩は、蓮の花（蓮華）を持ち、頭上に阿弥陀如来の化仏を置くが、これはすべての変化観音菩薩にも共通していることである。ただ、石仏では阿弥陀如来の化仏は省略されていることが多い。

※化仏・・・仏の肉髻部からは小さな仏がシャボン玉のようにどんどん生まれて飛び出しているといわれている。この飛び出す仏を仏に化けるという意味から化仏という。

なお、奈良時代以前の古い観音菩薩像は手に蓮華を持つ例は少なく、水瓶（水を入れる器）を持つもの、宝珠を持つもの、何も持たないものなどがあり、一定していない。また法隆寺の夢殿の救世観音のように冠に化仏がついていないものもある。

観音様が住む浄土は南方にある補陀洛山（補陀洛浄土）とされている。観光地として有名な「日光」は、かつて「二荒」と書かれていたという。

この「ふたあら（ふたら）」は補陀洛がなまったものと言われる。「二荒」という地名は、後に空海がやって来て音読みで読むと同じ音となる「日光」に書き改めたと伝えられている。

観音菩薩について書かれている経典は「法華経」の中の『普門品第二十五』（『法華経第二十五品観世音菩薩普門品』）、俗称『観音経』である。

観音菩薩は優しい姿に作られるため、墓地では女子の墓石としてよく利用されていた。

［像　容］菩薩形をして、左手は蓮華を持つ。

ア．菩薩形をして、冠をかぶり、左手は蓮華を持ち、右手は下げて与願印を結ぶ。

イ．菩薩形をして、冠をかぶり、左手は蓮華を持ち、右手は蓮華の上に当てようとしている。

この時の蓮華はまだ開いていないつぼみ（未敷蓮華）である。これは、観音菩薩の慈悲心によって人々の本来もっている仏性をまさに開かせようとする姿を表し、人々の救済を意味するという。

※未敷蓮華と開敷蓮華

未敷蓮華はまだ開いていないつぼみの蓮華のことで、人々の本来もっている仏性がまだ開いていないことをあらわし、逆につぼみが開いた開敷蓮華は仏性が開いたことをあらわしているという。

2・十一面観音菩薩

変化観音菩薩の一つである。変化観音菩薩としては最初のもので、顔が十一面もあるため、一面二臂（一つの顔と二つの肘［腕］）の聖観音

菩薩よりも、はるかに強大な威力を持つと思われた。頭上には観音菩薩に共通の阿弥陀如来の化仏があるが、その他に十一の顔（化仏）がある。すなわち頂上には如来の顔をした頂上仏面が一面、正面には慈悲面（菩薩面）が三面、向かって右側には瞋怒面（忿怒面）が三面、向かって左側には牙を出している狗牙上出面が三面、後ろには大笑面が一面の合計十一面を置く。中には、本面とあわせて十一面とするものもある。十一面を持つわけは、あらゆる方角（十方）に顔を向けているからという。

［像　容］十一面二臂の像で、菩薩形をしている。左手は、蓮華を挿した瓶（花瓶）を持っている。右手は下げて数珠を持ったりしている。また、左手は蓮華を持ち、右手は施無畏印であったりする。

3・千手観音菩薩

変化観音の一つである。正しくは十一面千手千眼観音菩薩といい、十一面の顔と千本の手を持ち、しかもその一手一手ごとの手のひらに目がある。十一面二臂の十一面観音菩薩よりもさらに強大な威力を持ち、千の慈悲の手、千の慈悲の目によって人々を漏れなく救おうとする菩薩である。千手千眼観音は手や目をたくさん持つことにより、蓮華を持つ観音菩薩の中では救済能力が一番であるとされ、そのために蓮華王菩薩とも呼ばれる。一千体の千手千眼観音のある京都の三十三間堂を蓮華王院と呼ばれるのはそのためである。

実際には千本の手を彫り出すことは困難なため、四十手や十六手に省略される。中央の合掌した手（この両手を『真手』という）を含めると、四十二手、十八手となる。四十手とするのは、一手で二十五の世界の人々を救うとされるからで、四十手の二十五倍で千手となる。

［像　容］十一面多臂の菩薩をした像で、中央の合掌した二手の真手の他に左右二十手の計四十手か左右八手の計十六手となっていてる。十一面観音菩薩と比べると、多臂である点のみ違いがあり、他は同じである。持物は、錫杖を持つ他は一定しておらず、さまざまである。

《二十八部衆（観音二十八部衆）》

千手観音の眷属として、二十八部衆がある。観音信仰の信者を守護する役目をもっている。次の通りである。

阿修羅王、迦楼羅王、緊那羅王、乾闥婆王、五部浄、金大王、金色孔雀王（孔雀明王をさす）、金毘羅王、波旬大将、沙迦羅竜王、神母天（鬼子母神をさす）、帝釈天王、大弁功徳天、大梵天王、東方天（持国天をさす）、鳩陀竜王、摩醯首羅王、摩睺羅迦王、密迹金剛（那羅延金剛と一対をなして仁王と呼ばれ、阿形の仁王様）、那羅延金剛（密迹金剛と一対をなして仁王と呼ばれ、吽形の仁王様）、摩和羅女、満毘耶王、満仙人、婆藪仙人、毘沙門天、羅婆迦羅王、毘楼博叉（広目天をさす）、毘楼勒叉（増長天をさす）

4・如意輪観音菩薩

変化観音菩薩の一つである。思惟形（考える形）をとるため半跏思惟像の姿勢に似ているが、半跏座ではなく右膝を立てて座る輪王座である。つまり、右は片膝を立て、右手で頬杖をし、首をややかしげて考えている座像である。手には菩薩名の通り如意宝珠（単に「宝珠」ともいう）と、車輪の形をして八方に矛先が出ていて投げて相手を倒す武器である輪宝（法輪、宝輪）を持つ。

宝珠は人々の願いを意のままにかなえさせ、輪宝は、人々の煩悩を打ち砕き、そして仏の教えが広がるのをたとえている。一般には一面二臂

や一面六臂の仏様である。

石仏としては、江戸時代中頃（元禄年間から享保年間に集中）から見られ、優しい姿から女性の信仰を受け、女性の間で広がった十九夜の月待信仰の本尊、あるいは二十二夜の月待信仰の本尊（二十二夜様・二夜様）ともなった。また、一面二臂の如意輪観音菩薩像は月待信仰の本尊の他に女子の墓石としてもよく見られる。墓石としての如意輪観音は、対象が人であるから一面六臂でなく一面二臂として描かれたのである。

〔像　容〕ア．輪王座をとり一面六臂の思惟像で、菩薩形をしている。右手第一手で思惟するために頬杖をつき、第二手は宝珠を持ち、第三手は数珠を持つ。左手第一手は左側後方に伸ばして台座に手をつき、第二手は蓮華を持ち、第三手は輪宝を持つ。以上が一般的な像容である。

イ．一面二臂像。

立て膝で座り（輪王座）、右手は頬杖、左手は台座に手をついている。アの一面六臂の像を簡略化したものである。

※十九夜月待（十九夜念仏）と二十二夜月待（二十二夜待）

「月待」とは、ある特定の月齢の日の夜に集まって供物を供え飲食を共にしながら、月が出るのを待って月を拝む行事のことである。この月待は女性たちによる信仰で、講の組織になっている。

月待は月が満ちる時よりも月が欠けていく時の方が重視されている。これは月が欠けていくことに対する恐れからと考えられている。

陰暦の十九日の夜の十九夜月待（満月と下弦の月の中間の月）は、念仏信仰と結び付き、十九夜に念仏を唱える行事となった。分布は、栃木県、茨城県、千葉県、それに千葉県よりの埼玉県の地域である。

二十二夜月待（下弦の月）は、特に埼玉県北西部から群馬にかけて見られた。

なお、越谷市内の月待塔は十九夜塔の他に勢至菩薩（三夜様）を本尊とする二十三夜塔も見られる。この二十三夜待塔は、その他の月待塔が地域的に偏在しているに対して、全国各地に分布しているものである。陰暦の二十三日の夜の二十三夜の月は真夜中の子の刻（今の十二時）頃に出る下弦の月で、別名「真夜中の月」とも言われた。

5．馬頭観音菩薩

観音菩薩は慈悲相であるが、馬頭観音菩薩に限って明王のように恐ろしい顔付きや姿、つまり忿怒相をしている。そのため馬頭明王とも言われる。頭上に必ず馬頭を置き、三面（一面）三眼八臂が代表的である。この頭上にある馬は、この世の理想的な王である転輪聖王がのる優れた馬であるという。

荷馬（運送馬）や農馬（農耕馬）が普及するにつれ、江戸時代中頃から馬を使用する人々によって馬頭観音菩薩の信仰がさかんになった。それにともない馬頭観音菩薩の石仏が、講中によって馬の供養や馬の無病息災の祈願を込めて各地で造立されるようになった。時代が下がるにつれて個人の死んだ荷馬や農馬の供養という墓石としての石仏も見られてくる。この墓石としての馬頭観音の石塔は、必ずしも馬の死骸が葬られているのでなく、例えばその馬のたてがみを埋めたりしたものである。

馬頭観音の造立場所は死馬捨て場、峠や山道などの交通の難所地、村はずれの追分、そして屋敷内などである。

本来の馬頭観音菩薩の信仰は六道の一つである畜生道に迷う人々を救う仏様であった。

なお馬頭観音菩薩の墓石としての石塔は、墓石に共通して見られる一面二臂で表されている。

また、馬頭観音墓石の彫像から「牛頭観音」と刻まれた牛の墓石が見られたり、千葉県では、馬に乗った「馬乗り馬頭観音」の石仏がよく見られる。

〔像　容〕ア．三面（一面）多臂（四臂・八臂）の像で、怒怒相となり、頭髪は燃え上がる炎髪で、頭上に馬頭を置き、両手で胸の前で馬頭口印を結んでいる。牙をむきだし、目は三眼（第三の目は額にある）のこともある。

三面（一面）三眼八臂の姿が代表的である。

持物は一定しておらず、棒・剣・斧・羂索などが見られ、また、恐れを抱かないようにと施無畏印をしているものもある。

イ．死馬の墓石は、一面二臂像である。

6．その他の観音菩薩像

その他の観音としては、准胝観音、不空羂索観音があり、また白衣を付けた白衣観音、魚籃（魚の籠）を持つ魚籃観音、楊柳（柳）の枝を持つ楊柳観音などの三十三観音、乳房を露出して幼児を抱く子安観音（子育て観音）、延命観音なども見られる。

そこで次に、准胝観音と不空羂索観音の二つ観音と「六観音」「観音三十三身」「三十三観音」について紹介する。

《准胝観音菩薩》

東密（真言密教）に見られる観音菩薩で、別名『七倶胝仏母』ともいう。七倶胝とは、七千万つまり無数を表し、「七倶胝仏母」とは、過去の無数の仏様たちを生んだ母という意味である。仏の母としての子授けの力があるとして信仰されている。

この菩薩は斧などを持ち、三面（一面）三眼十八臂の姿が代表的である。六観音・七観音や三十三カ所観音札所巡りに関連して見られる。石仏としてはまれである。

また、准胝観音座像の蓮台の下方に蓮台を支え持つ二人の童王が脇侍として見られることがある。

《不空羂索観音菩薩》

台密（天台密教）に見られる観音菩薩で、慈悲の羂索で迷える人々をことごとく救うという。羂索とは、本来は鳥を捕らえる網（羂）と魚を釣り上げる糸（索）という意味である。この羂索からは人々を一人も漏れることなくことごとく救うことができるので、「空しからず」と言う意味の「不空」を頭に付けて、不空羂索観音菩薩と言うのである。この観音は三面（一面）三眼八臂の姿が代表的といえ、名前の通り手に羂のような羂索を持つ（羂索の代わりに数珠を持つこともある）。その他には、錫杖・蓮華それに煩悩を追い払うための払子などを持つ。石仏としては准胝観音と同様にまれである。

《六観音》

六道輪廻の思想の影響で、六道に六種類の観音菩薩を配するという六観音の信仰が各地で見られた。六観音とは、千手観音（地獄）・聖観音（餓鬼）・馬頭観音（畜生）・十一面観音（修羅）・准胝観音（人）・如意輪観音（天）の六つを指す。以上の六観音を乗者は「千勝馬、柔順の如し」と韜呂合わせして覚えている。

以上の六種類の観音の選び方は真言宗の場合で、選ばれた准胝（准提）

観音は斧を持ち、密教の影響が強く腕が十八臂で表されたりしている。それに対して天台宗では、准胝観音の代わりに、絹のような羂索（あるいは数珠）を持ち、腕が八臂で表されたりする不空羂索観音となる。

一方、准胝・不空羂索の両方を加えて七観音とすることもある。

《観音三十三身》

観音菩薩は、仏の身で救われる人には仏の姿で現れ、比丘（男性の僧侶）や比丘尼（女性の僧侶）の身で救われる人には比丘や比丘尼の姿で現れ、優婆塞（男性の信者）や優婆夷（女性の信者）の身で救われる人には優婆塞や優婆夷の姿で現れ、童男や童女の身で救われる人には童男や童女の姿で現れ、竜の身で救われる人には竜の姿で現れ、夜叉の身で救われる人には夜叉の姿で現れるというように、願いを求めている人々の能力に応じて三十三の姿に変えて救うと言われている。

以上は、普門品に説かれているのでこれを「普門示現」（三十三応現身）という。普門品で説く『観音三十三身』は次の通りである。

1. 仏　2. 辟支仏　3. 声聞　4. 梵王　5. 帝釈
6. 自在天　7. 大自在天　8. 天大将軍　9. 毘沙門　10. 小王
11. 長者　12. 居士　13. 宰官　14. 婆羅門　15. 比丘
16. 比丘尼　17. 優婆塞　18. 優婆夷　19. 長者婦女　20. 居士婦女
21. 宰官婦女　22. 婆羅門婦女　23. 童男　24. 童女　25. 天
26. 竜　27. 夜叉　28. 乾闥婆　29. 阿修羅　30. 迦楼羅
31. 緊那羅　32. 摩睺羅伽　33. 執金剛神

この三十三応現身の考えから三十三カ所観音霊場ができ、三十三カ所の霊場（寺院）をめぐる観音札所めぐり（観音巡礼）が行われた。各霊場では聖観音、十一面観音、千手観音、馬頭観音、准胝観音、不空羂索

観音、如意輪観音のいずれかを安置する。

代表的な三十三カ所霊場に、「西国三十三カ所」「坂東三十三カ所」「秩父三十四カ所」（秩父三十四カ所は、もとは三十三カ所であった）がある。それらをあわせて百観音と言い、各地に『番供養』と刻まれた石塔が見られた。百観音の百は十三信仰で観音の忌日が百ケ日であることからきているともいわれている。

《三十三観音》

法華経の三十三応現身の影響で成立した三十三種類の観音菩薩である。わが国や中国などで信仰されたさまざまな観音菩薩を集めたものである。一般に白衣をまとっている。主なものをあげると次の通りである。

白衣観音（びゃくえかんのん）、楊柳観音（ようりゅうかんのん）、魚籃観音（ぎょらんかんのん）、持経観音（じきょうかんのん）、持蓮観音（じれんかんのん）、瑠璃観音（るりかんのん）、滝見観音（たきみかんのん）、水月観音（すいげつかんのん）、一葉観音（いちようかんのん）、始蛸観音（しだこかんのん）、蛇臥観音（じがかんのん）、竜頭観音（りゅうずかんのん）、岩戸観音（いわとかんのん）、合掌観音（がっしょうかんのん）、円光観音（えんこうかんのん）、洒水（灑水）観音（しゃすいかんのん）

その他には、

遊戯観音、施薬観音、徳王観音、宵頭観音、威徳観音、延命観音、衆宝観音、能静観音、阿耨観音、阿摩提観音、葉衣観音、六時観音、多羅尊観音、普悲観音、一如観音、不二観音、馬郎婦観音　がある。

なお、三十三カ所観音霊場で祀られている三十三カ所の観音菩薩を模して一か所に集めた三十三基の観音菩薩像を「三十三カ所観音」と呼んで、「三十三観音」と区別することがある。また、千手観音・聖観音・馬頭観音・十一面観音・如意輪観音などを適当に選んで、合わせて三十

地蔵や子供がまとわりつく地蔵などもみられる。

三基分を集めて一か所に安置した例もよくある。

7・地蔵菩薩

釈迦仏（釈迦如来）の入滅後（死後）から第二の釈迦仏とも言える弥勒仏（弥勒如来）の現れるまでの五十六億七千万年の無仏時代に、この世に現れて人々を救う菩薩である。釈迦仏は正法・像法時代の救済主、地蔵菩薩は今の末法時代の救済主、弥勒仏ははるか未来に出現する救済主である。

なお正法時代とは、釈迦入滅後の五百年（あるいは千年）間で、この期間は釈迦の正しい教えが行われ、仏法の功徳があるという。像法時代は、正法時代の後の五百年（あるいは千年）間で、この期間は正しい教えが行われなくなるという。末法時代は、像法時代の後にくる時代で、釈迦の教えが衰え、釈迦の教えでは救えなくなり、世の中に天変地異などが起こるとされている。わが国では一〇五二年に末法の世に入ると信じられていた。

地蔵菩薩の姿は、菩薩の姿では人々は近寄りがたいであろうと、菩薩の姿でなく親しみやすい僧侶の姿をしている。つまり坊主頭で衣（僧衣）と袈裟（左肩から右腋の下にかけて衣の上をおおう、長方形の布）を着る比丘（男の僧侶）形をしているのである。そのため庶民には親しみやすい姿となっている。

石仏としては、子育て・盗難除け・寿命を延ばす延命・火事を防ぐ火除け・病気平癒・無病息災などさまざまな願いをかなえてくれる仏様として、村々の道端や辻によく見られる。また墓地では、賽の河原の地蔵和尚の物語の影響により、子供の墓石としてよく見られる。さらに男性の墓石としても利用されている。他に、子供を抱いている子安（子育て）

なお「地蔵和賛」は、空也上人によって唱かれたとされ、その内容は、幼くして死んだ子供が冥土にある賽の河原で父母を慕して石を積んで塔を作っていると鬼が来て持っている鉄棒でこれを崩すので、そこで地蔵菩薩が来て鬼を追い払い子供を救うという話である。図の「和賛地蔵」石仏には、恐ろしさのあまりに片手で目を覆う幼子や鬼に向かって許しを乞う幼子の姿も描かれている。

また、地蔵菩薩の真言は「オン　カ　カ　カ　ビサンマエイ　ソワカ」と唱える。その中の「カ　カ　カ」とは地蔵菩薩の大きな笑い声であるとの俗説がある。

地蔵菩薩の縁日は二十四日で、特に七月二十四日は地蔵盆である。

［像　容］比丘形をして、左手に宝珠（玉）、右手に錫杖（杖）を持っているのが一般的である。

なお錫杖（上端の円環に数個の錫の輪を付けた僧侶の持つ杖）を打ち鳴らすのは、蛇や虫たちを驚かせ逃げさせるためであると言われている。

《地蔵菩薩と阿弥陀如来》

地蔵菩薩と阿弥陀如来は実は同体であるとして、地蔵と阿弥陀を並立したものや、阿弥陀如来の代わりに地蔵を中尊にして脇侍に観音と勢至を置く地蔵三尊像も見られる。

8・六地蔵

六地蔵は、六道輪廻、つまり苦しみの『地獄』、貪りの『餓鬼』、愚かさの『畜生』、争いの『修羅』、『人』（人間）、喜びの『天』（天上）の六つの迷界である六道を輪廻転生する人々がどこにいて迷っていても救いの手を差し伸べられるようにと、六つの分身として表されたものである。このように六つの分身を考えて六体の地蔵を信仰することは

平安時代末期に始まったとされている。六地蔵の石仏が寺院の門前や墓地の入り口に見られるが、これは室町時代末期から見られてきたもので、あの世とこの世の境に置かれていると言われている。

また、六つ辻にも「六道」にちなんで「六道の辻」として置かれた。

これらは、六面石幢の石塔に刻まれた六面石幢六地蔵や一石に刻まれた一石六地蔵、二石に分けて刻まれた二石六地蔵としても見られる。

六地蔵のそれぞれの持ち物は一定していないが、最も多いのが、右手錫杖に左手宝珠（上部がとがった珠［玉］）を持つ姿である。他には、両手で数珠（小さな珠を糸に通して輪としたもので、手にかけて持ち、仏を拝んだりするときに使う）を持つ地蔵、右手施無畏印に左手与願印（引摂印ともいう。引摂とは、仏が臨終の人々を引き導くこと）を結ぶ地蔵、合掌（両方の手の平を合わすこと）している地蔵、両手で柄香炉（柄の付いた香炉、香炉とは香をたく入れ物）を持つ地蔵、両手で幡（竿に長い布を下げた一種の旗）を持ってかざしている地蔵、天蓋（一種の日傘）を持ってかざしている地蔵などが見られる。

これらの地蔵菩薩の首によく赤色のよだれ掛けが掛けてあるが、これは赤子や子供達の供養であったり、今はなき我が子の冥福を祈るためである。

《十王信仰》

十王信仰の「十王」とは冥土にいるという十人の裁判官をさす。人は死後、生前に犯した罪によって冥土で十人の王に七日ごとに順次裁かれるという。そこで生前のうちに十王に対して供養を行い、死後に十王の裁判を受けるときに手心を加えて罪を軽くしてもらおうと願うのである。これが十王信仰である。

十王の内、五番目に裁くのが閻魔王（胸に日月がついている）、俗に言う閻魔大王であり、本地仏は地蔵菩薩である。五七日（死後三十五日目）に裁くのである。

地蔵菩薩はさまざまな現世利益をかなえる仏様であり、六道輪廻をし、六道にさまよっている人々を救う仏様でもあるが、さらに十王信仰とも結び付き、閻魔大王は実は地蔵菩薩であるとし、冥土に行く死者を地獄に落ちないようにと救う仏さまでもある。現在でも交通事故や山の遭難などで亡くなった人の冥福のため地蔵菩薩像をその場所に安置することがよく行われているのはそのためである。

次に十王のそれぞれの本地仏を順番にあげると次の通りである。

初七日（死後七日目）に裁く秦広王の本地仏は不動明王
二七日（死後十四日目）に裁く初江王の本地仏は釈迦如来
三七日（死後二十一日目）に裁く宋帝王の本地仏は文殊菩薩
四七日（死後二十八日目）に裁く五官王の本地仏は普賢菩薩
五七日（死後三十五日目）に裁く閻魔王の本地仏は地蔵菩薩
六七日（死後四十二日目）に裁く変成王の本地仏は弥勒菩薩
七七日（死後四十九日目）に裁く泰山府君王の本地仏は薬師如来
百ケ日（死後百日目）に裁く平等王の本地仏は観音菩薩
一周忌（死後一年目）に裁く都市王の本地仏は勢至菩薩
三回忌（死後二年目）に裁く五道転輪王の本地仏は阿弥陀如来

三回忌とは死亡した年もいれて数える、いわゆる「数え」で三年目、つまり死んだ年の翌々年にあたる日である。三年忌ともいう。

《十三仏信仰》

十王信仰をもとに、さらに発展した信仰が十三仏信仰である。十王の本地仏にさらに密教の代表的な仏様である阿閦如来、大日如来、虚空蔵

菩薩の三仏を加えて十三仏となったものである。

十三仏信仰とは、十三仏をそれぞれの忌日に本尊として死者の追善供養をするものである。この十三仏信仰が今日でも見られ、人が死亡してから七日目の初七日の法事（法要）から始まって、「数え」で三十三年目の三十三回忌までの計十三回の法事にそれぞれの法要本尊として配当されている。次にそれらの十三仏をあげると次の通りである。

不動明王（初七日）、釈迦如来（二七日）、文殊菩薩（三七日）、普賢菩薩（四七日）、地蔵菩薩（五七日）、弥勒菩薩（六七日）、薬師如来（七七日）、観音菩薩（百ケ日）、勢至菩薩（一周忌）、阿弥陀如来（三回忌）、阿閦如来（七回忌）、大日如来（十三回忌）、虚空蔵菩薩（三十三回忌）

亜者は以上の仏様たちを『ふしゃもん、ふじみやっかんせい、あみだ、あーだいこ』としてごろ合わせで覚えている。

なお、祝い事は伸ばしても法事は伸ばしてはいけない（早くするにはかまわない）と言われるのは十王のそれぞれの裁きの日に間に合わせなければいけないためである。

9・その他の菩薩像

《文殊菩薩・普賢菩薩（釈迦如来の脇侍）》

『三人寄れば文殊の知恵』とのことわざや『文殊の知恵、普賢の行願（身の行いと心の願い）』と言われるように文殊は知恵の仏様、普賢は修行の仏様である。文殊菩薩は釈迦の左脇、つまり向かって右側にいる脇侍で、普賢菩薩は釈迦の右脇にいる脇侍となっている。

文殊菩薩の像容は獅子（ライオン）に乗って、左手に経巻（お経）を持ち（または左手に蓮華を持ち、その蓮華上に経巻が載せられている）、右手に剣を持っている像容が代表的である。その時の頭髪は頭に結う髻の数によって違いが見られ、一髻文殊、五髻文殊、八髻文殊とに分かれる。このうち最も多いのが、髪の毛を五つに束ねた五髻文殊（五字文殊）である。これは文殊菩薩の真言が「オン、ア、ラ、ハ、シャ、ノウ」と五字分（『オン』は除く）を唱えるためである。

法華経が説く普賢菩薩の像容は、白象に乗り合掌する姿である。法華経を信ずる人々を守る菩薩であるとも言われ、そのため法華経信仰では独立した像となり、さらに法華経は女性の往生をも説くことから法華経を守る普賢菩薩は女性の信仰を集めて美しい姿に作られる。遊女が普賢菩薩の化身であったとの言い伝えのもとで、江戸時代には遊女のことを「普賢」と言って、遊女の美しい姿を普賢菩薩にたとえられるのはそのためである。

密教で説く普賢菩薩の像容は、複数の白像に乗り、左手には金剛鈴、右手には金剛杵を持っている。人々の寿命を延ばすといわれるために「普賢延命菩薩」と呼ばれる。腕は二臂や多臂（二十臂）が見られる。

また、十三仏の中で見られる普賢菩薩の像容は、左手は蓮華を持ち、右手は小指と薬指を折りその他の指を伸ばして指先を外側に向け、手の平を前方に向けているのがみられる。

《観音菩薩・勢至菩薩（阿弥陀如来の脇侍）》

観音菩薩は阿弥陀の左側、つまり向かって右にいる脇侍となり、冠には阿弥陀如来の化仏が見られ、手には蓮華を持っている。阿弥陀三尊の来迎相では、両手で蓮台を捧げている。

勢至菩薩は阿弥陀の右側、つまり向かって左にいる脇侍となり、冠には水瓶（水を入れる器）が見られ、両手は合掌しているのが一般的である。

両手を合掌しているのは阿弥陀三尊の来迎相の勢至菩薩にも見られる。

また独立した像としての信仰としては、女性の月待信仰（月の出を待つ行事が行われる信仰）である二十三夜様（三夜さま）の本尊となる。三夜様の本尊である勢至菩薩は月天子の本地仏であるとされている。二十三夜待信仰は、江戸時代は全国的に見られ、二十三夜塔は全国各地に造立されている。

《日光菩薩・月光菩薩（薬師如来の脇侍）》

日光菩薩は薬師如来の左脇（向かって右側）に、月光菩薩は右脇（向かって左側）に侍する脇侍となる。日光菩薩は手の平の上や手に持った蓮華の上に日輪（太陽）を、月光菩薩は同じく手の平の上や手に持った蓮華の上に月輪（月）を載せている場合が見られるが、日輪や月輪の印が全くついていない場合も多くあり、この場合は単独では見分けがつかない。

日光菩薩は、日の光で人間の煩悩を照らし、無知を打ち破るように仏の英知を表し、月光菩薩は、月の光のようなやさしくて慈しみの心、つまり仏の慈悲を表しているといわれている。

《勝軍地蔵菩薩》

甲冑に身を固め武器をとる地蔵菩薩が、戦場まで現れて信仰する武士の危難を救い、戦勝に導いたというエピソードがある。武士の最高の位である征夷大将軍として知られる坂上田村麻呂が地蔵菩薩を信仰したとされることから、勝軍地蔵は戦国時代の後半から武士の間で広まった。

石仏としての像容は右手に錫杖、左手に宝珠、身に甲冑をつけ、馬に乗る姿である。勝軍地蔵は、修験道の始祖である役ノ行者が京都の愛宕山で勝軍地蔵を見たことから、愛宕神社に祭られる愛宕権現の本地仏と

された。そのため愛宕信仰のあった地域でこの石仏が見られる。

《弥勒菩薩》

弥勒菩薩は、釈迦の教えを受けた菩薩で、今は兜率天に住み修行をしているという。仏滅（釈迦の入滅）後の五十六億七千万年後にこの世に出現して竜華樹のもとで悟りを開き、説法してすべての人々を救い上げるという。いわば未来の第二の釈迦如来といえよう。一般的には菩薩形をして、手を膝の上に合わせて、その両手の上に宝塔を載せている姿をしている。

ただし、京都にある広隆寺や奈良にある中宮寺に見られる弥勒菩薩のように奈良平安時代の頃までは、将来いかにして人々を救おうかと須弥山の上空の兜率天で考え込んでいる姿で、左足を下げ右足を左足の膝の上に置き思索する半跏思惟の形をとっている。この形は、平安時代までに作られた弥勒菩薩像に見られる。

悟りを開いた弥勒如来は、如来形をしていて右手は施無畏印、左手は降魔印をとっている。

《虚空蔵菩薩》

功徳（ご利益）を蔵すること虚空（大空）のようであるという意味から名付けられた菩薩である。虚空蔵菩薩は一般には冠を頭にかぶり、左手には宝珠（または三弁宝珠）を乗せ（または、宝珠を上に乗せた蓮華を持ち）、右手には剣を持っている。

弘法大師空海も行ったという「虚空蔵求聞持法」は頭脳を明晰にし記憶力を高めるとされ、一度読み書き見たものは決して忘れないと言われている。また日蓮が修行のために比叡山に登る時に虚空蔵菩薩に「われを日本一の智者となし給え」と祈ったというエピソードがある。

このように虚空蔵菩薩は頭がよくなり、記憶力が高まる菩薩とされ、後に庶民の間に虚空蔵信仰が広まっていくと福徳を授ける菩薩ともなった。江戸時代中頃から「十三参り」（虚空蔵菩薩は十三仏信仰のうち最後の十三番目の仏様である）と呼ばれる虚空蔵参りが行われるようになり、数え年十三才になる少年・少女たちが三月十三日に虚空蔵様に参拝し、知恵と福徳を願ったのである。別名、知恵参りとも言われる。京都の「嵯峨虚空蔵」（法輪寺）が有名である。

なお、密教で説く虚空蔵菩薩は、大日如来を中心として組合わされる五智如来の変身であるとして、五種類の虚空蔵菩薩からなる五大虚空蔵菩薩像が見られる。

《妙見菩薩》

北辰（北極星または北斗七星）を神格化したもので北辰菩薩ともいう。右手に剣を持ち、亀の上に乗っている。

北辰は人の寿命をつかさどるとされることから、妙見菩薩は人の死期を除き生を定めると言われている。また国土を守り、災害を除き、福寿を増すとも言われる。

《浄行菩薩》

身体の治癒を願う箇所に相当する浄行菩薩像の箇所を、たわしで洗うと、その箇所が治るとされている。そのために、この菩薩を「洗い仏」とか「たわし仏」と呼ぶことがある。浄行菩薩像は、日蓮宗寺院の浄行堂に安置されていることが多く、衣服は通肩の着こなしをして合掌している。釈迦如来が、多宝塔の内に入って多宝如来と並んで座った時に、釈迦如来に法華経を説くようにと願ったのが、上行菩薩・無辺行菩薩・浄行菩薩・安立行菩薩の四人の菩薩で、四上菩薩（地涌の四菩薩）と呼ばれる。浄行菩薩は、その四上菩薩の一人である。

《馬頭菩薩》

馬の上に乗る多臂の菩薩で、糸や管、桙、糸桙、桑の枝などの変容に関係するものを持っている。

「馬頭」の由来は、この菩薩が生まれた時に、あるいはこの菩薩が美しい声で説教した時に、馬が感動して悲鳴をあげたことからきているなどといわれている。

図1．観音菩薩像（越谷市下間久里の不動堂）

図2．観音菩薩像（越谷市見田方の八坂神社）

図3．十一面観音菩薩像

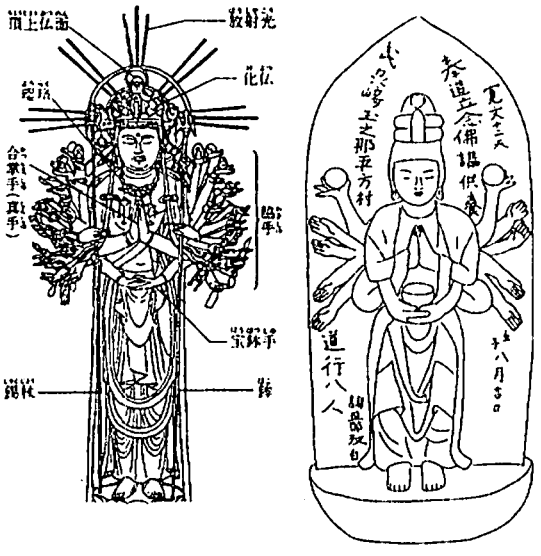


図4．千手観音菩薩像

（越谷市平方山谷の覚山坊墓地）

図5．如意輪観音菩薩像

（越谷市平方山谷の覚山坊墓地）

図6．如意輪観音菩薩像

（越谷市弥十郎「やぼ」の地蔵堂）

図7．馬頭口印（馬口印）

寺院の仏像に見られる馬頭口印

石仏に見られる馬頭口印

図8．馬頭観音菩薩像（越谷市恩間の勢至堂）

図9．馬頭観音菩薩像（越谷市西新井の西教院）

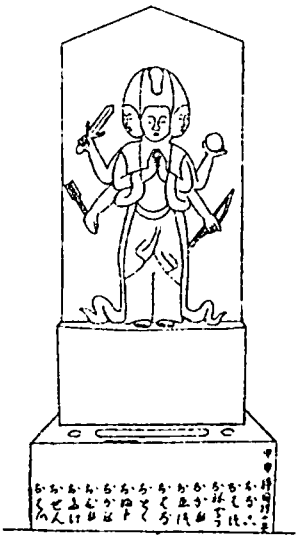
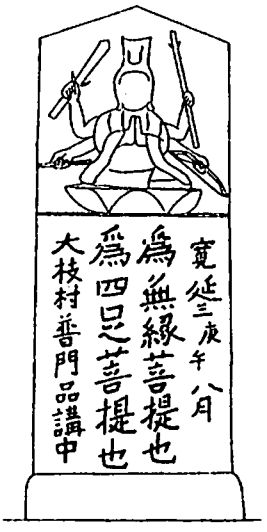


図10．馬頭観音菩薩像（春日部市大枝の歓喜院）



合掌する馬頭観音菩薩像

図11．六観音（越谷市恩間の薬師堂）

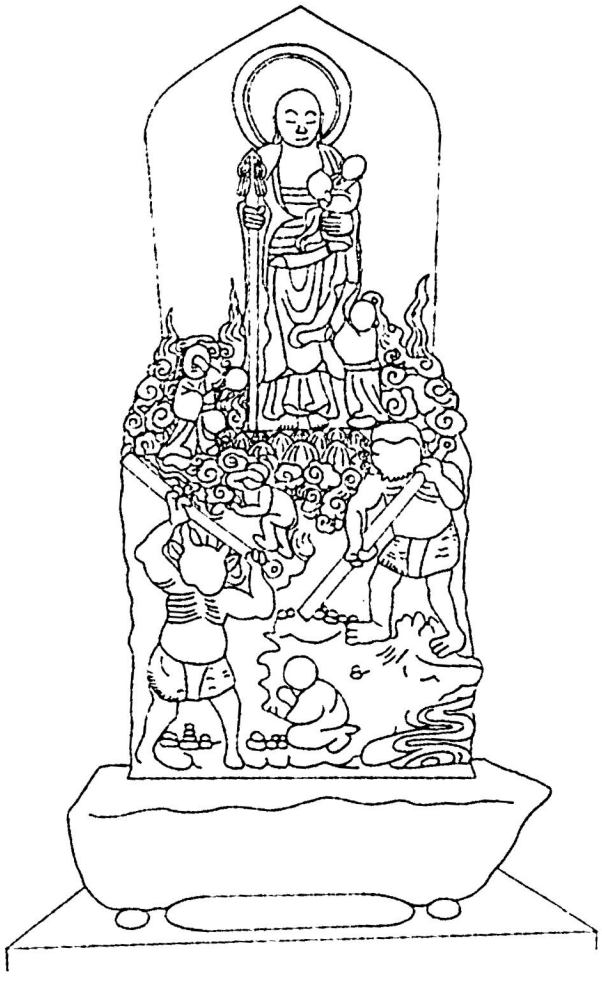


図13・和賛地蔵（越谷市蒲生本町の清蔵院）

図12・子安地蔵（越谷市新町の今はなき薬師堂前）

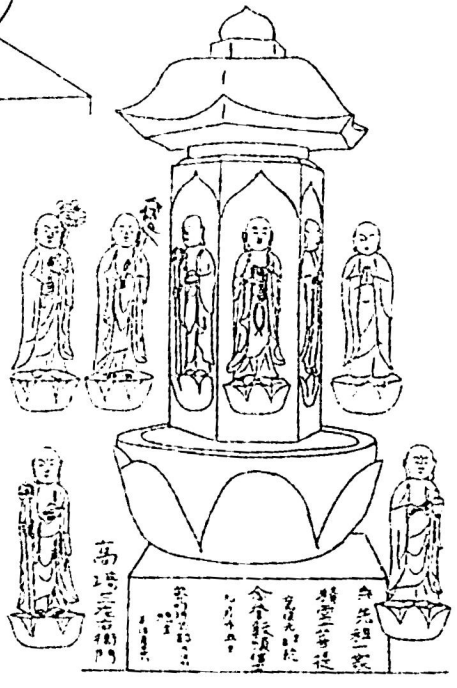
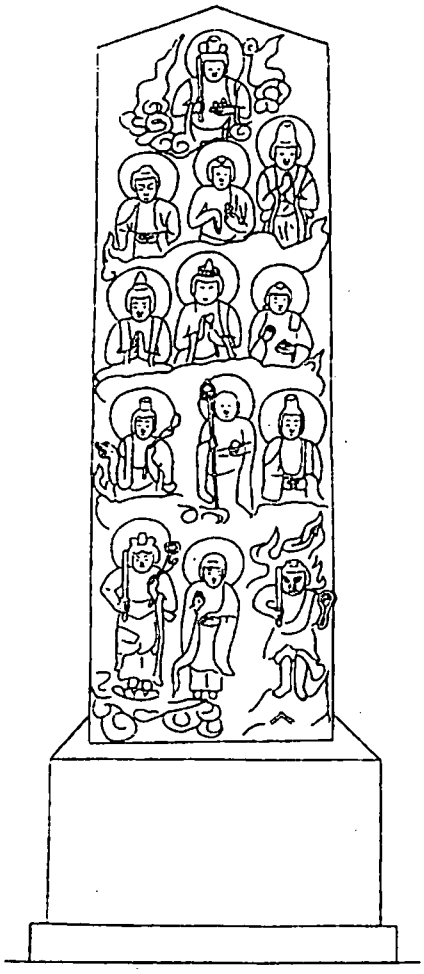


図14・六地蔵（越谷市大泊の観音堂）

図15・六地蔵（春日部市大畑の香取神社）

図16・十三仏（越谷市平方の戸崎墓地）



（宝塔が描かれてない）
（大日如来）（薬師如来）（弥勒菩薩）（不動明王）
（阿閦如来）（観音菩薩）（地蔵菩薩）（釈迦如来）
（阿弥陀如来）（勢至菩薩）（普賢菩薩）（文殊菩薩）
（虚空蔵菩薩）

十三仏塔である。最上段には宝冠を戴き、左手に三弁宝珠を乗せ、右手には剣を持っている虚空蔵菩薩、二段目は向かって右側から、智拳印を結ぶ大日如来、左手で衣の一端を握り、右手は降魔印の阿閦如来、阿弥陀定印を結ぶ阿弥陀如来、三段目は、右手は施無畏印、左手は薬壺を乗せた与願印の薬師如来、左手は蓮華を持ち、右手は蓮華の上に当てようとしている観音菩薩、合掌している勢至菩薩、四段目は、禅定印を結ぶ弥勒菩薩（本来なら宝塔を持つが、この像は持たない。描き忘れたのか。）、宝珠と錫杖を持つ地蔵菩薩、左手は蓮華を持ち、右手は小指と薬指を折りその他の指を伸ばして手の平を前側にして指先を外側に向けている普賢菩薩、最下段は、羂索と剣を持つ不動明王、如来の特色である肉髻がはっきりしていないが、施無畏・与願印を結ぶ釈迦如来、左手はお経を載せた蓮華を、右手は剣を持つ文殊菩薩の計十三の仏さまが描かれている。